

科学研究費助成事業（基盤研究（S））研究進捗評価

課題番号	16H06320	研究期間	平成28(2016)年度 ～令和2(2020)年度
研究課題名	人種化のプロセスとメカニズムに関する複合的研究	研究代表者 (所属・職) (令和5年3月現在)	竹沢 泰子 (京都大学・人文科学研究所・教授)

【令和元(2019)年度 研究進捗評価結果】

評価	評価基準	
A+	当初目標を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる	
A	当初目標に向けて順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる	
○	A-	当初目標に向けて概ね順調に研究が進展しており、一定の成果が見込まれるが、一部に遅れ等が認められるため、今後努力が必要である
	B	当初目標に対して研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
	C	当初目標より研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である
(意見等)		
<p>本研究は、身体的差異が不可視な集団の「人種化」プロセスとメカニズムを明らかにしようとするものである。国際シンポジウム等を精力的に開催し、国際誌を含む数多くの論考や研究編著の刊行もなされている。また、海外研究者との学際的連携を通して、欧米からの視点に偏重しがちな「人種化」論にオルタナティブを投げかけており、研究代表者の活動実績は高く評価する。しかし、研究計画調書に掲げられた「身体的差異が不可視な集団の人種化プロセスとメカニズム」に関する仮説の検証については、近現代日本史や人類遺伝学を専門とする研究分担者との十分な連携に基づく進展が認められなかった。</p>		

【令和5(2023)年度 検証結果】

検証結果	当初目標に対し、期待どおりの成果があった。
A	「日本・アジアの事例と欧米や他地域の事例とを接合させることにより、「人種化」のプロセスとメカニズム、特にその生成・連鎖・転換を明らかにする」という研究目的は十分達成され、従来の欧米中心的な人種理論のパラダイムからの脱却に向けて多大な学術的貢献があった。特に、研究代表者が筆頭編者を務めて海外の共同研究者らと編んだ論文集・学術雑誌特集号としての国際共同研究のインパクトは大きく、研究代表者が環大西洋地域を中心とする多くの大学から招待講演を求められたことはその証左である。また、日本語の学術書においては、各執筆者による個別具体的な専門研究の提示にとどまらず、互いの論文を積極的に言及しつつ共通点と相違点を明確にしていく座談会の内容も併せて掲載する対話方式を採用して、研究代表者・研究分担者・連携研究者・海外研究者の間に醸成されてきた複眼的な知見が明示されたことは、学術連携の分かりやすい効果的な提示方法として評価できる。